ほっスピタル・かいづか

問合せ先　貝塚病院
☎072－422－5865

（35）近見視力検査で弱視の早期発見を

視力の発達する期間（生後～８歳頃）に遠視や斜視などにより「物をくっきりと見る」事が妨げられると視力の発達は遅れてしまい、これを「弱視」と言います。視力の発達が終了する８歳頃までに発見し対処しなければ、それ以降に眼鏡をかけても一定以上の視力は望めません。治療は、低年齢ほど効果は大きく、早期発見・早期治療が重要です。

子どもの視力は発達途上にあることから「近くがボンヤリ」としか見えなくても子ども自身は異常とは思わないので、自分からは視力不良を訴えません。そのため、遠見視力検査よりも30㎝の距離で測定する近見視力検査の方が弱視の検出の可能性が高いです。

したがって、「ちゃんと見えているかどうか」という確認なら、まずは「近くの物が見えているか」を調べる近見視力検査が必要です。両目の弱視の場合、テレビや絵本に近づいて見たり、目を細めたりすることがあります。片目の弱視の場合、良い方の目を隠したりすると嫌がったりします。

子どもの見え方に関して気になる事があれば気軽にご相談ください。

眼科　認定視能訓練士　小畠永瑛